

高田 淳著

魯迅詩話



中公新書

249



中公新書 249

高田 淳著
魯迅詩話

中央公論社刊

高田 淳 (たかた・あつし)

1925(大正14)年、朝鮮京城府に生まれる。

1945年、満州派遣、捕虜。1947年、復員。

1952年、東京大学文学部中国文学科卒業。

現在、東京女子大学教授。専攻、中国思想。

著書『墨子』(明德出版社)

『中国の近代と儒教』(紀伊国屋新書)

魯迅詩話
中公新書 249

© 1971年

検印廃止

昭和46年 4 月 15 日印刷

昭和46年 4 月 25 日発行

著 者 高 田 淳

発行者 山 越 豊

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 東京プロセス

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2-1

振替東京34 電話(561)5921代

目次

魯迅と詩……………二

前編

習作時代……………二三

（一九〇三年）

辮髪を切る 自ら小像に題す……………一五

（一九一二年）

辛亥革命の死 范君^{はんくん}を哀^{かな}しむ 三章……………二九

後編

『新青年』から『野草』へ……………五〇

〈一九三一年〉

中華の病態

忘却のための記念

香り失せた国花

封神の跋扈

内戦を悲しむ

紅と碧の幻想

健児と美人のために

日の本の光と影

父子の情

〈一九三二年〉

人を殺す英雄

冬に耐える秋菊

千里を飛ぶ蓬子

戦雲やみて残春あり

鄔其山に贈る……………六〇

柔石を悼む……………六五

O・E君の蘭を携えて帰国するを送る……………八一

無題……………八六

無題……………八九

湘靈歌……………九三

無題 その一、その二……………九八

増田渉君の帰国するを送る……………一〇六

客の詣りに答う……………一二一

無題……………一二〇

偶成……………一二四

蓬子に贈る……………一二八

一・二八戦後に作る……………一三一

孺子の牛となる

自嘲……………一三四

嬌女の嘆き

所聞……………一四五

河豚の悲しみ

無題……………一四七

子規を憶う

無題……………一四九

湘靈の戦い

無題……………一五三

へ一九三三年へ

新年 春山の祈り

画師に贈る……………一五八

租界 打牌の春

二十二年元旦……………一六〇

空しく留む 紙上の声

『呐喊』に題す……………一六三

戟を荷いて 独り彷徨

『彷徨』に題す……………一六六

涙 江南の雨に灑ぐ

楊銓を悼む……………一七一

精衛 東海を填む

三義塔に題す……………一七六

蝸牛の家

無題……………一八四

戦士の死

丁君を悼む……………一八九

越女征き 秦女逝く

人に贈る 二首……………一九五

人生の一知己

無題……………二〇〇

庄制の府 杭州

郁達夫の家を杭州に移すを阻む……………二〇四

荒村の一釣徒

酉年秋の偶成……………二二二

〈一九三四年〉

魯迅を呪う

報に脳炎を患うと載り 戯れに作る……………二二六

無声に 驚雷を聴く

戊年初夏の偶作……………二二九

深夜の予感

秋夜感有り……………二三七

〈一九三五年〉

星斗 正に闌干たり

亥年残秋の偶作……………二三八

詩話余説

……………二四六

あとがき……………二五五

魯迅詩話

魯迅と詩

詩と旧詩と漢詩

いまから、もう二十年ほど前のはなしである。戦中を日本で過ごし、そのまま戦後を迎えた中国の留学生Sさんのことばを私は思い出す。北方系らしい、骨ばって背の高いSさんが、あるときこんなことをいった。「魯迅がえらいのは、詩を書かなかったからだ」。

一九四五年、日本の敗戦に引きつづいて、中国の内戦がいままさに毛沢東の率いる中国人民解放軍の勝利のうちに終りを告げようとしていたときである。Sさんの日当たりのよい下宿の二階六畳の部屋には、毛沢東の書が貼ってあった。

魯迅が全く詩を書かなかったというウソになる。たしかに、ここに見る四十数首の詩がある。しかし、中国の伝統的知識人、文人が詩にわが思いを洩らすような仕方では、魯迅は詩を書かなかった。この意味で、私はいまでもSさんのことばの正しさを思う。

ここに詩というのは、旧詩、旧体詩のことである。新詩、新体詩に対し中国でそのようによば

れるそれは、字数・句数や平仄・押韻などの格律を守る定型詩をいう。日本で一般に「漢詩」とよばれるものであるが、しかし日本の場合、いわゆる「漢文」が中国の古典文学を漠然と指すように、漢詩も古典詩一般をアイマイに指す。アイマイにというのは、日本人にとって漢文・漢詩が古典であるかどうかの問いなしに、漠然とそのように思われているからである。まして、中国における旧詩がいまの中国人の古典でありうる理由も事実もない。中国人が新詩に対しそれを旧詩とよぶのは、過去の旧文化の表現形態としての格律詩と認めるからである。

詩は、中国文学史の長い展開のなかで、中心的な位置を占めてきた。個人の詩文集が編まれることは伝統的知識人としての資格を保証するあかしであった。魯迅は旧文学の桎梏を打破し、新文学のために戦った人だといわれる。その魯迅が、ともあれ旧詩を書いた。

孫伯醇氏は魯迅の詩について、こう書いている。「中国でも魯迅から、もう漢詩はだめになっている。これも時の流れとして仕方のないことであろうが、漢詩の将来に望みはないものと思われる」(『ある中国人の回想』昭和四十四年)。逆にいうと、「この一度も詩人を以て任じたことのない魯迅先生の筆の先から、中国旧体詩の最後の奇花が生まれた」(『馮至詩文選集』一九五五)ということになる。

魯迅自身、すでにいっている。「私は一切の好詩は、唐でもう終ったと考えています。それ以後、如来の手のひらから逃げ出すことができるような齊天大聖(孫悟空のこと)でないかぎり、手をつけるべきではないのです。しかし言行不一致のため、時にはでたらめに数句をひねり出すこ

とがあり、考えてみればまことにおかしなことであります」（楊霽雲あて書簡、一九三四・一二・二〇）。この魯迅の「言行不一致」のおかげで、いまわれわれは魯迅の旧詩をみることができけるわけなのだが、それには二つの理由があげられる。

一つは、人からの依頼である。「私はふだん詩を作らないのですが、ただ人から字を書いてくれと頼まれたとき、でたらめに数句をひねり出して責めをふさいただけで、原稿も残していません」（同、一九三四・一〇・一三）。「文人」魯迅の名声に対してその筆墨をもとめたのは、日本人が最も多い。友人として魯迅自身が書き与えた贈答詩もあるが、書き与えた人と直接関係のない詩もある。しかし、人の依頼に答えただけというのは、形式的な理由ではない。折にふれて書いておいたものを、魯迅は人の依頼に応じてそれを取り出し、書き与えたのである。

「旧詩は本来得意とするところではなく、已むをえずして作ったもので、あとでいつも忘却し、いま思い出すことのできるのは数首だけです」（同、一九三四・一二・九）。わが情を已むをえずして発したとき、それがたまたま旧詩であったというのである。古い時代の教養のもとに育った魯迅は、だから意識的に旧詩を作ったのではない。おのずとして発する魯迅の情が、旧詩のなかに語られていったのである。従って、書いたあとすぐ忘れてしまったとか、原稿も残していないとかいうのは、謙抑のことばではない。本当にそうだったと思わねばならない。

魯迅詩集の形成

この魯迅に、「詩集」を思い出させた人がいる。楊霽雲である。一九二三年の『呐喊』以来、魯迅は小説・雑感のたぐいを、年代の区切りに自ら編集し、題

記や自序・後記を書くことによってその時どきにまとめてきた。ただ『集外集』（一九三五）だけは、その名の通り、一九〇三年から一九三三年までの「集」外に漏れたものを、楊霽雲が集めたものである。もっとも、魯迅が協力し、命名も魯迅による。「未刊の拙作がこのように多いとは、まことに意外です」（一九三六・五・二三）と、魯迅は編者・楊霽雲に書いている。そのような集外の集という形で、魯迅は旧体の詩を一つ一つ思い出していったのである。

ところが、そのとき魯迅は僅か十四首しか思い出せなかった。それどころか、詩句を忘れてしまったため、臨時に補作しなければならぬ詩まである始末だった。作詩年月もすっかり前後不明になったようで、「詩に年月がありませんが、私はまだ大体その先後を覚えていますので、いまま少し改めました。どうかそのように並べて下さい」（同、一九三四・一二・一九）。にもかかわらず、『集外集』に収められた十四首の年代は、そのまま従いうる正確なものではない。魯迅は詩を書いたとき、必ず日記に贈った人名と詩句とを書きとめていた。なぜそのとき、魯迅が日記を見なかったのか分らない。しかし少なくとも、日記によって自分の詩を正確に網羅しようとしなかったことだけはたしかである。

この『集外集』の意図をさらに展開したのが、『集外集拾遺』（一九三八）である。『集外集』編集では魯迅は協力者にとどまったが、今度は魯迅自ら遺漏を收拾しようとした。しかし、その途中で魯迅は世を去る。意を受けついで未亡人許広平や日本留学時代以来の友人許寿裳たちの手によって、この『集外集拾遺』は成ったが、題名は魯迅の命名による。末尾に「詩」として収めら

れた数は、『集外集』の倍の二十九首にのぼった。うち一首は、『集外集』で臨時に補作した「范愛農を哀しむ」一首を許寿裳が訂正したものだから、正確には二十八首である。さきの『集外集』の詩と合わせると、合計四十二首になる。魯迅の死後、詩だけを「詩集」としてまとめようとする試みが、ここに始まったといえよう。

ただ魯迅は生前、詩稿を自分で出版しようとしたことがあった。「詩稿については、全く売る手だてがありません。……自己出版は本来、編集と書店の束縛をさけることができるものですが、私は何度もやってみてみな失敗してしまいました」(蔡斐君あて書簡、一九三五・九・二〇)。それは『集外集』編集によって、おのが詩に対する自覚が触発された結果であらう。

許寿裳の『魯迅旧体詩集』序(一九四四年五四記念日)によると、魯迅の死の翌年一九三七年の春、魏建功が魯迅の遺詩を手写し、それを木刻にして出したいといってきた。依頼をうけた許寿裳は、許広平に詩の収集をたのみ、その結果『魯迅日記』を中心に集めた約四十二首の手鈔一卷ができ上る。しかしそれを魏建功に送った直後、蘆溝橋事件(一九三七・七・七)に発した戦火が日中の全面的戦争に発展し、ためにその刊行は実現するに至らなかった。それがいまようやくして、非紀先生の手により五十二首の『旧体詩集』が出版される段取りに至ったという。

ところで、それより前、別に魯迅詩集が編纂されている。茅盾他編「魯迅先生詩鈔——旧詩二十五首」(『文陣叢刊』の二、一九四〇)、奚名編『魯迅詩集』(一九四一)、曉岡編『魯迅郁達夫郭沫若劉大白四大家詩詞鈔』(一九五〇)などである。

新中国成立後、上海の魯迅紀念館が魯迅旧詩の手稿四十首を集め、北京の文物出版社から出したのは一九五九年である。さらに魯迅紀念館が編集責任者となり、魯迅旧詩の墨跡を『魯迅詩稿』（上海人民美術出版社、一九六一）として刊行する。陳毅の題署と郭沫若の序文を付したそれはすべて四十五首を収め、付録として魯迅が書いた古人の詩詞・文章十九編を収める。他に、北京文物出版社から活字本『魯迅詩集』（一九六三）が出ている。そこには四十二首の旧詩、付録として日本留学前の十二首が収められている。

ここに、いわば詩を作り筆墨を弄する「詩人」魯迅、「文人」魯迅の像がうち立てられたかの如くである。さらにそれに併せて、魯迅旧詩の注解や評釈が行なわれる。まとまったものとしては、鄭子瑜『魯迅詩話』（一九五二）がおそらくはじめだろう。そこに詩の解釈もないではないが、詩についての魯迅のことばの編録ともいうべきものである。他に劉泮溪・孫昌熙・韓長経「魯迅の詩歌と書信」（『文史哲』一九五〇）、錫金「魯迅詩本事」（『文学月刊』一九五六）、胡冰「また『魯迅詩本事』を語る」（一九五七）などがある。

これらの上に立って、魯迅旧詩注釈の集大成というべきものが出された。張向天『魯迅旧詩箋注』（広東人民出版社、一九五九）、周振甫『魯迅詩歌注』（浙江人民出版社、一九六二）、そして『魯迅詩箋選集』（文学研究社、一九六七）である。いずれも白話詩（口語による詩）や歌謡に類するものまで含めた網羅的なもので、必ずしも旧体詩だけに限定したものではない。三番目のものは、一九六一年刊の『魯迅詩稿』を付してあり、著者名のない香港出版のものである。さらに、江天

『魯迅詩新解』（文教出版社）をつけ加えることもできる。これまた出版年月のない、香港刊のものだが、六十年代末のものだろう。

わが国では、『魯迅選集』第十二卷（昭和三十一年）、主として張向天の説によるその改訂版（昭和三十一年）がある。石川忠久「魯迅の旧詩」（『近代中国の思想と文学』昭和四十二年）は、「魯迅の本質はさて置き、現代に於ける旧詩という視点から詩人として魯迅を考え」たものである。

詩と詩話

いま私が『魯迅詩話』と題して魯迅の旧詩を扱うのは、決して「詩人魯迅」の像を確立しようがためではない。詩人、詩を語らず、詩話盛んにして詩衰う、ということばもある。もし魯迅が真の詩人であれば、この四十数首の詩を書いただけでよい。それを顯称^{ひょうけん}敷衍^{ふえん}する詩話のたぐいが必要とせぬはずである。

「詩話」と称したのは伝統的用語に従ったのだが、魯迅の詩の解釈注解にとどまらぬ魯迅の詩の世界を、魯迅の生きた時代と詩をうたい出した魯迅の心との双方に即して述べてみたからである。詩であるからには、用いた用語とその組み合わせによって生み出されるイメージ全体に触れなければならない。それが旧詩であるからには、用いた典故を知らねばならぬだろうし、うたわれた状況の具体的事実の説明も必要となる。ただ、それは魯迅詩理解の前提、参考でしかない。詩句を具体的事実に結びつけて、詩の解釈が成ったとするのは、新たな「魯学」の訓詁学と評されてもやむをえぬことである。

私が「詩話」という形でしか述べることができないと思ったのには、もう一つ理由がある。魯

迅の旧詩を、小説・雜感・散文詩など、魯迅の他のことばとの関わりにおいてとらえてみたかったからである。魯迅が意識的には向わなかったこの旧詩の世界を、私は魯迅の他の表現形態にいわば融解させてみたかった。旧詩の説明に魯迅のことばを引用したのは、そのためである。魯迅の詩を、魯迅自らをして語らしめようとしたわけである。また日記や書簡などを引用して、魯迅の平常心、日常性のことばに引き延ばそうとしたのも、同じ意図からである。

ただ、それは魯迅の詩の独自性を無視しようとするためではない。戦闘的雜文を書いたといわれる魯迅自身、散文とは異なる詩の独自性について述べている。「あの詩は意気さかんであるが、しかしこの種の激烈な攻撃には雜感など、散文形式の方が向きます。かつ、言語表現に屈折がほしい。でないと、反感を招きやすい。詩歌は比較的永久性のあるものだから、かかる題材には不向きです」(一九二五・六・二八、『兩地書』)。詩には詩としての形がある。それは革命スローガンではない。怒りは怒り、詩は詩である。「詩人ならば、感情を抑えきれないために憤怒し、笑罵するのも、むろん悪いことではない。しかしそれは嘲笑にとどめ、熱罵にとどめるべきである。その上、『喜笑怒罵、みな文章となり』、それによって敵に傷を負わせ、あるいは死なすというのでなければならぬ」(『惡罵と恐喝は決して戦闘ではない』一九三二、『南腔北調集』)。

これは詩形の比較的自由な新体の詩についていわれている。しかし、新詩でも「節調がなく韻がなければ、それはうたえず、うたえなければ憶えられず、憶えられなければ、人びとの頭から旧詩を追い出し、その位置を占めることはできない」(寶隱夫あて書簡、一九三四・一一・一)。これ

は、『新詩歌』第四期（一九三四・一一）にそのまま掲載された新詩についての意見である。

魯迅の詩についての考えは、次のことに要約されよう。「詩には形式が必要です。憶えやすく、分りやすく、うたいやすく、人にきき耳をたてさせるものでなければならぬ。しかし、形式は厳格である必要はない。韻はなければならぬが、必ずしも旧い詩韻による必要はない。口から自然に出る調子であれば、それでよいのです」（蔡斐君あて書簡、一九三五・九・二〇）。

なお、この『魯迅詩話』が魯迅の詩を年代順に置いたのは、「もし人を知り世を論じようとするなら、編年体の文集を見なければならぬ」（『且介亭雜文』序言 一九三五・一二・三〇）からである。